

信仰教育としてのキリスト教教育について

鄭 泉 聲

目 次

序

I. 神学的基礎工事の復興が必要である

II. キリスト教教育は信仰教育である

1. 聖書はキリスト教信仰の書物である
2. キリスト教教育は神との出会いの体験である
3. キリスト教教育は神の支配を要求する
4. キリスト教教育は修練が必要である

III. 結 語

註

参考文献

序

日曜学校の開設から端を発したキリスト教教育運動は、こゝ数十年の間世界的に押し進められ、日曜学校も教会学校と名前が書き換えられ、元来宗教教育と呼ばれたものがキリスト教教育となり、カリキュラムは勿論の事、教会学校の教室の拡大にまでエネルギーが注がれた事は否定できない事実である。これは、キリスト教教育の神学的根拠の探索によって、教会の教育的使命が確実に把握されたためであったと言うよりは、むしろ近代的教育理念の強調によって、新しい教学法が学習過程及び諸活動に具体化するよう強く要求された結果であると言った方が、当を得た答であろう。然しながら、このような発展は、一面に於いて、キリスト教教育の指導者たちが予期した成果を挙げ得なかった事もまた事実であり、甚だ遺憾である。

もとより、キリスト教教育は新しい契約の下に生きる神の民共同体即ち教会自身のわざであり、一般教育の理念にのみ頼って、その確固たる成果をあげ得るものではないのである。

これは、勿論、教育の対象の問題を問題としなくても良いと言う意味ではない。キリスト教教育が具体的に生徒に対して施行されるからには、その被教育者である生徒の性質、発達状況、要求、思考能力及び環境等について知ることは重要である。然しながら、教会がキリスト教教育の主体^(註1)である以上、教会の本質から離れ、キリスト教教育が神の恵の下での共同体の信仰のわざであることを忘れて、ひたすら一般教育理念にのみ専念してキリスト教教育を行おうとすれば、それは大変大きな間違いを犯していることになる。端的に言って、現在施されているキリスト教教育は、果して次の世代の者にどういう信仰を与えているか、又次の世代の教会はどういう教会になるだろうかと問い正す必要がある。聖書中心であるべきだとか、或は生徒中心でなければならないとか、学習過程についていろいろ議論すべき諸見解があるが、要するに、キリスト教教育の根本問題は学習過程ではなくて、キリスト教教育の目的にあり、教会の首な

るキリストへと立ち返り、キリストが教会に与えられた使命即ち「それゆえに、あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ。」(マタイ 28 : 19 ~ 20) に生きる事である。

I. 神学的基礎工事の復興が必要である

1950 年代以後、世界的に名を馳せた幾人かのキリスト教教育指導者たちは、挙って、キリスト教教育は神学的基礎が必要だと説き、キリスト教教育が教会のわざであり、それ故に効果的なキリスト教教育のプログラムは、須らく教会の「宣教と教育」の使命と言う観点に於て計画されなければならないと力説した。彼らは又教会がこのような教育的使命を最善に果そうと思うなら、それは他でもなく、礼拝し、証しする信仰の共同体の中で養育されるべきで、従来のキリスト教教育に於いて行われているたゞの聖書教授は、キリスト教教育の一部分にすぎないと主張したのである。^(註2) 然しながら、惜しくも、このような教会のわざとしての教育と言う神学的反省による主張は、ごくわずかな人たちによって理解され受け入れられたのみで、多くの人たちは耳をかさなかったようである。

一方、キリスト教教育は、現代教育学の発達に沿ったものと過って同一視(identify)され、現代教育学的教学法によつての宗教的教育と見なされてしまった。そのため、キリスト教教育の教師たちは、多くの場合、一般教育学的教学法をより一層修得することによって、あたかも、自分たちが従事しているキリスト教教育に自信がついたような間違つた安心感に落ち入つた。そして、人間の生物学的、心理学的或は社会学的ありさまと、学習の要領をより一層把握するのが即ちキリスト教教育を効果的に完成するものだと、楽観的に考えたのである。当然の結果として、このような現代教育学的教学法にしか目を向けないキリスト教教育は、名前こそ日曜学校から教会学校へと改称され、曾ての宗教教育と言う名称からキリスト教教育へと換えられたが、結果的には、多くの場合、何ら神学的基礎がないため、教会の「宣教と教育」という明確なる使命からはずれてしまい、ひたすら学校教育的な資料蒐集と教学法の改善に満足感を享受するのみとなり、そして事実いろいろと教学法は改善されたが、教師の信仰内容はあまり問題とならず、被教育者が果して信仰の共同体の一員として実質的に成長しているかどうか殆んどなおざりになった嫌いがあるのである。

然しながら、われわれは、キリスト教教育の目的は、神学的観点から見て、それが教会の宣教のわざとして、教会が主体的にその責任を担い、人びとをキリスト者として生きるように導くことである事を知っている。つまり、キリスト教教育とは、教会がその継承者を造って行く行為である。それが故に、若し真剣にキリスト教教育に従事しようとするならば、それはまず、生物学的、哲学的、心理学的、社会学的などと一般教育学的に思考して計画し人間形成をするのではなくして、むしろ先に神学的に考えて信仰ある人間形成をすべきである。

そういう訳で、キリスト教教育は神学的に基礎工事をやり直さなくてはならない。これはキ

リスト教会が当面している緊急課題であると言えよう。

Ⅱ．キリスト教教育は信仰教育である

1. 聖書はキリスト教信仰の書物である

教育的配慮から、人間形成のプロセスの為には、被教育者のさまざまな発達段階や状況を考慮して、それに適した教材を作らなければならないという観点から、聖書の教授もまた「教材化」されて提供されなければ、学習経験は生起しないと言われているが、又このために、いろいろと多様な方法が試されてきたが、果してこのような配慮の下に教育された人は、そういう配慮をあまりやかましく言わなかった時代に教育された人たちに較べて、より良い信仰生活を営んでいるだろうか。筆者の見るところでは、それはより短い時間でもって、以前の人よりもすぐれた聖書知識を持つようになったかも知れないが、必ずしもより良い信仰生活を送るようになったとは言えないようである。

ヘンダーライトは、「聖書の物語は、単なる過去の出来事の記録以上のものである。すなわち、イスラエルの人びとが燃えるような熱心さで、彼らの子供たちにこの物語を語り伝え、神の民としての彼らの存在そのものがこれらの出来事に根拠づけられていることを自覚したとき、そこに神と民との出会いがそのつど、現実を生起したのである。」^(註3)と言った。これは、言い換えれば、即ちイスラエルの教師たちは、聖書の記事を通して、彼らの次ぎの世代に神信仰を伝えたのである。確かに聖書は、神の民共同体の書物である。それは、活ける主なる神が如何にその民に自ら語られたか、又その民が如何にその神に答えたかを記した書物である。したがって、普通なみの書物のように教材化して使うものではなく、神が今一度新たにその民に語りつけられるように取扱われなければならない。それは、もし「教材化」と言うことばを借りて言うならば、神の恵を再現して、神と共に生きる民を造れるように聖書を教材化して教えるべきである。それ故、聖書の教授は、こうした神の恵に生きる神の民共同体の生活との関連に於て、始めて意味がわかり、神の民共同体の神の恵に与った感激のメッセージの伝達と体験が可能となる。こういう神の民共同体の自己意識と生活そのものに導き入れずに、真の聖書の理解ができると言う事はあり得ないし、又厳格に言って、そういう自己意識と生活のない場で聖書の何が教えられようと、結局それは聖書に関する文字上の理解であって、真の聖書教授ではなく、キリスト教教育とはならない事は明らかである。

こういう訳で、自由主義的な人間観及び批評学的聖書学ならびに心理学の進歩にともなう現代教育理論などの諸影響により、被教育者中心の教育観が今日のキリスト教教育に反映しているが、勿論われわれは決してこうした被教育者中心の教育観を全面的に否定するものではないが、われわれは、聖書がキリスト教教育の教科書である以上、又教会が神の民共同体であり、聖書はその共同体の信仰の書物であるからには、少くともキリスト教教育に関する限り、聖書の授業をするばあい、単に聖書の文字に関して思弁をもてあそぶことなく、神がわれわれに対して、どのような生きたかゝわりを持ち、現に働きかけておられるかを生徒に体験させなければなら

ない。教育的配慮は無視できないが、それよりも重要なのは、如何にして、生徒が、聖書を聖書たらしめた神の御わざを知り、その御わざに答え得る信仰者になるように導く事である。聖書にある神の御言葉が土台となって、はじめて信仰が明確に保持されるのであるから、御言葉と信仰との間には恒久的な本質的關係が存在する。御言葉と信仰との間には恒久的關係が存在する故に、神の御旨を正しく知り、正しい信仰者となるために、聖書はわれわれの教師また導き手となるのである。こういう訳で、聖書それ自体は神を信ずるものの心を照し導くための道具となり、学ぶ者をして信仰に至らせる現実的媒介ともなる。^(註4) それ故、聖書は信仰に導くために教科書として使わなければならないのは言を持たない事であり、信仰に導くため以外の聖書教授は、もとより聖書作者の原意に反するものである。

2. キリスト教教育は神との出会いの体験である

さて、聖書は神の民共同体の書であり、学ぶ者が神の民共同体の意識と生活そのものに導き入れられなければ、真の聖書理解ができないと述べたが、これは結局神が現にその民を通して働きかけておられる事を体験することでもある。聖書の文字をもてあそぶのではなく、聖書を聖書たらしめた神との出会いが最も重要な問題となるわけである。神の民共同体に於て、対話的關係を求める神が究極的實在でおられる事を人間が主体的に自覚することによって、語るものとしての「我」と語られるものとしての「汝」との關係を体験する事が可能となり、そういう出会いに於ける対話が実現する。これは勿論人間の霊の中に、外側から働きたもう神の霊の力によるものであるが、そこには「つねに認識と経験、解釈と参与という二重の探究課題を含み、しかも両者は相関的である。」^(註5) われわれは、かくして御霊の働きによって神の實在に対して自己を開放し、自己超越の方向へと進むのである。「すなわち、人間の霊は、自己超越的な方向のなかで、いかにして神の霊的現在に参与しようとするが、しかもまず神の霊の働きによって呼び覚まされ、向う側から捉えられることがなければ、けっして真の出会いを経験することはできない。」^(註6) と山内一郎氏は言っているが、キリスト教教育は、このような神との出会いの経験を生涯にわたって可能ならしめるべく環境造りの努力が払われなくてはならないことになる。勿論、エクスタティックな又は熱狂的な神との出会いを警戒しなければならないが。こうなると、キリスト教教育の課題は又、イエス・キリストにおいて現わされた神との出会いへと、人びとを招き入れることでもあると言えるから、積極的な意味での神との出会いの経験がぜひ必要ではあるまいか。

人間が神に救われるのは、人間的努力によるのではなく、たゞ神の恵によって与えられるのである事は、聖書の確固たるメッセージであって、信仰とは、人間が、恵を給うた神に向って自己を開く決断の行為に他ならない。然しながら、教会がこのような神の恵を語り伝える時、人びとにその神の恵を再び想起させ、体験させて、神に出会わさなければならないのである。そうすることによって、人びとは生ける主を知り、その恵に与ることができるようになる。われわれが伝達するのは、生きた信仰であり、生きた神との出会いの關係に入ることである。生きた信仰の体験なくしては、神の恵を受けていると証しすることはできない。

かくして、キリスト教教育に於て、教材や教学法の重要性がやかましく言われているが、実の所、最も力強い教学法とは、神の民共同体即ち教会の生活に参加し、その生活を通して、キリスト者とは何か、キリスト教的価値とは何かを自ら体得することになる。それが故に、キリスト教教育に於ては、カリキュラムを考える前に先づ教師の資質を問う。生徒は教師を通して、イエス・キリストを知り、神との交わりへと進むからである。少くとも、子供に関する限り、彼らは神に応答する(response)前に、親や教師たちの信仰態度に極めて敏感である。

こういう訳で、キリスト教教育の教師たるものは、その重責を感じて、自ら慎まなければならないし、又同時に、学ぶ者をして真剣に適切なキリスト教信仰体験に導かなければならない。あたかも、「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」(エペソ2:19)とパウロが言ったように、神との生きたかゝわりの中に人びとを導き育てなければならない。「神は霊であるから、礼拝をする者も霊とまこととをもって礼拝すべきである」(ヨハネ福音書4:24)とイエス・キリストは言われた。キリスト教信仰は、教理以上のものであって、霊的な事であり、生命に関するものである。キリスト教教育はカリキュラムではなく、人びとをイエス・キリストの救いへと導き入れることである。それ故、キリスト教的外貌を教えるのではなくて、人間の魂の深所に存在するものに大いに関心を払い、その魂に神との出会いによる喜びを体験させるべく努力することが、キリスト教教育者の当然あるべき姿勢であると言えよう。

3. キリスト教教育は神の支配を要求する

「神がイエス・キリストにおいて、われわれとの交わりを求めたもうとすれば、それはわれわれの罪深い存在を、さわらず、つつかずに、そのまま存続させることではない。キリストはわれわれを御自身に対して誠実なものとするために、われわれを御自身に結びつけたもうた。そういうわけで、われわれは彼から命じられるとき、御言葉のままに従わざるを得ない。われわれが神に背を向けていとなむ生は、もはやあってはならない。われわれは自己が本性から敵対している主によって、最高度の要求をされている。このように、キリストによって、われわれの全人格が独占される。」^(註7)とカルヴァンは言ったが、正にその通りで、神がイエス・キリストによってわれわれを解放し自由にしたが、それは又われわれを神に奉仕させるための行為でもある。したがって、われわれはキリストの救いによって、神の恵の意志に拘束されたことになる。それ故、われわれはもはやわれわれ自身のものではなく、主のものであり、日常生活すべてを通してキリストのみあとに従うべく方向づけられたのである。

キリスト教教育が、たゞ単に聖書の知的認識に止まり、記憶されるのみのものではないことは、これによっても明らかである。「人間の靈魂のすべてを占領し、そこに住もうときに始めて十分に受容される、まさに人間の全体性にかゝわるものである。」^(註8)と山内一郎氏はカルヴァンの教会教育観を説いたときに言った通りである。それ故、キリスト教教育は又真実にキリストに絶対服従することでもある。キリストに最高の王としての服従を尽すとき、キリスト信仰が証しされ、キリスト教教育がなされているのである。そこでは、人間の主権を主張することが許

されない。それはあくまで徹底した服従である。ブルトマンは、「イエスの倫理は服従の倫理なのである。……イエスは服従の思想を極端なまで貫いた。」と言う。^(註9) イエスは自分自身極端まで父なる神に服従したと同時に、彼に従うものにも徹底的に服従を要求したのである。漁師であったシモンとその兄弟アンデレ及びヤコブとその兄弟ヨハネが、イエス・キリストに弟子として呼ばれた事^(註10)や、取税人であったレビが、イエスの弟子となった例などを見ても、^(註11) その人たちの後に残された船や網又は収税所及び金が問題ではなかった。それは、「われに従へ」と言われたイエス・キリスト御自身が、この世の凡ゆるものと比較できない最重要な方であったからである。「われに従へ」と言ったその人イエスは絶対者であったから、それが彼らをして徹底的にイエスに服従を余儀なくしたのである。今日、キリスト教教育に於て、最も欠ける所は、このようなキリストに対する絶対服従が殆んど要求されていないということである。キリストに服従しようとしなくて、キリストの弟子になろうとは、とんでもない間違いだと、ボンヘファーは力強く語った。^(註12) 活きたキリストに絶対服従しようとしなくて、キリスト教は、キリスト教に非ずして、キリストに絶対服従しようとしなくて、キリスト教には、キリストが存在しない。キリストが存在しないキリスト教は、キリスト教ではないし、そういうキリストが存在しない教会のキリスト教教育は、キリスト教教育ではないのである。何しろ、生きていますキリストが、われわれの生の唯一の依り所であり、意義がある根拠であるからである。かくして、キリスト教教育に於ての問題点とは、この絶対服従を要求するイエス・キリストを教師と生徒はどう扱うにかゝるのである。イエス・キリストに於て現わされた神に絶対服従するかどうか、即ち、神の支配の前に立たされたものが、その神の支配の中に喜んで入るかどうかの決断が要求されているのである。それである故、もしキリスト教教育者又はその被教育者が、聖書の言はすべて正しく信じられると認めるだけで、すこしもその言に威嚇されず、イエス・キリストを主と崇めて絶対服従をしないならば、彼らはキリスト者であるとは呼べないし、同時に、正しいキリスト教教育に参加しているとは言えないのである。

4. キリスト教教育は修練が必要である

カルヴァンはキリスト者の生活について、「キリストの弟子と言うのは、たゞ、真実にキリストにならば、彼と同じ道を行く覚悟をしているもののみである。」^(註13) と言ったが、もしそうだとすれば、真実にキリストにならねば、キリストと同じ道を歩まずして横道にそれることになれば、明らかにキリストの弟子ではなくなるわけである。「われわれの生が単に義認によるのみでなく、キリストの第二の恩寵の賜物すなわち聖化によっても規制されていることに注意しようとしなくては、われわれはキリストのそばを通り過ぎてしまうことになるのである。」^(註14) とニーゼルはカルヴァンの考えを説明している。それ故、われわれはキリストの弟子として、又聖化によって規制されている者として、常にキリストにならうべく慎み深く歩まねばならないし、又同じ仲間の者がキリストの道からそれることをも正さねばならない。それは共同体の一分子としての責任でもある。神は、キリストが地上におられた間、絶えず十字架の修練をキリストに与えられたが、それは又同時に、その民をして、御子イエス・キリストと

同じ形になるよう修練することを要求されているのである。^(Mt 15) こうする事によって、神に対するわれわれの無意義な抵抗が粉砕されて、彼に完全服従ができるように仕向けて下さっている。即ち、「アダムにおいて失われていた神の義にあずかることを回復するものであるが、このような再生、回復は、けっして突如として、あるいは急激的に完成するものではなく、かえってたゆみのない漸次的成長、発達の過程である。だから人間には、全生涯を通しての悔改めと修練が求められ……われわれが肉の重荷を負って生きるかぎり、信仰が不完全であるというだけでなく、むしろ不完全であるが故に、たえず学びつづける修練の必要がある。」^(Mt 16) と山内一郎氏がカルヴァンの教会教育観について書いている通りである。ニーゼルは教会の戒規についてのカルヴァンの考えを、次ぎのように要約している。即ち、「イエス・キリストは、御言葉の宣教と聖礼典のしるしを通じ、聖霊の力によってその民と出会おうとしたもう。そういうわけであるから、教会の集りの中に宣べ伝えられる御言葉に対して、あらわに反抗し、悔い改めない生活を送っているのを、自ら言葉と行いによって示すものが参与していることはあり得ない。御言葉があなどられることを予防するために、牧師たちと長老たちとは、ひとつひとつの教会の肢に気を配り、おのおのに神の言葉をもって、ひとりひとり訓誡を加えなければならない。……この個別的な語りかけにも耳をかさず、神の御言葉を公然と投げすてるものは、最後には、キリストをそこで冒瀆し、栄光を傷つけることが起らないために、教会の集会から閉め出されなければならない。」^(Mt 17) と。カルヴァンのこうした強烈な考えは、当然キリスト教教育にも大いに関わる所があるのは言うまでもない。何しろ、キリスト教教育に於ては、神の御言葉が宣べ伝えられ、そして悔い改めのある生活が求められているからである。

更に、この問題について、イエス・キリスト御自身の態度を見よう。

念の為、これと関係のある聖書の箇所を幾つか列挙すること：

- (1) 「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない。」(マタイ 5 : 20)
- (2) 「それからイエスは、数々の力あるわざがなされたのに、悔い改めることをしなかった町々を、責めはじめられた。わざわいだ、コラジンよ。わざわいだ、ベッサイダよ。おまえたちのうちでなされた力あるわざが、もしツロとシドンでなされたなら、彼らはとうの昔に、荒布をまとい灰をかぶって、悔い改めたであろう。……ああ、カペナウムよ、おまえは天にまで上げられようとでもいうのか。黄泉にまで落されるであろう。おまえの中でなされた力あるわざが、もしソドムでなされたなら、その町は今日までも残っていたであろう。しかし、あなたがたに言う。さばきの日には、ソドムの地の方がおまえよりは耐えやすいであろう。」(マタイ 11 : 20 ~ 24)
- (3) 「村人は、エルサレムへむかって進んで行かれるというので、イエスを歓迎しようとはしなかった。弟子のヤコブとヨハネとはそれを見て言った、主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまうように、天から火をよび求めましょうか。イエスは振りかえって、彼

らをおしかりになった。」(ルカ 9 : 53 ~ 55)

(4)「もし、あなたの片手が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両手がそろったままで地獄の消えない火の中に落ち込むよりは、かたわになって命に入る方がよい。……もし、あなたの片足が罪を犯させるなら、それを切り捨てなさい。両足がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片足で命に入る方がよい。……もし、あなたの片目が罪を犯させるなら、それを抜き出しなさい。両眼がそろったままで地獄に投げ入れられるよりは、片目になって神の国に入る方がよい。」(マルコ 9 : 43 ~ 47)

(5)「この時から、イエス・キリストは、自分が必ずエルサレムに行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきことを、弟子たちに示しはじめられた。すると、ペテロはイエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございませんと言った。イエスは振り向いて、ペテロに言われた、サタンよ、引きさがれ。わたしの邪魔をする者だ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」(マタイ 16 : 21 ~ 23)

(6)「それから、イエスは宮にはいられた。そして、宮の庭で売り買いしていた人々をみな追い出し、また両替人の台や、はとを売る者の腰掛をくつがえされた。そして彼らに言われた、わたしの家は祈の家となえられるべきであると書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」(マタイ 21 : 12 ~ 13)

(7)「朝はやく都に帰るとき、イエスは空腹をおぼえられた。そして、道のかたわらに一本のいちじくの木があるのを見て、そこに行かれたが、ただ葉のほかは何も見当らなかった。そこでその木にむかって、今から後いつまでも、おまえには実がならないようにと言われた。すると、いちじくの木はたちまち枯れた。」(マタイ 21 : 18 ~ 19)

(8)「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはிரらないし、はいろうとする人をはいらせもしない。……偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたはわざわざいである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つくったなら、彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。盲目な案内者たちよ。あなたがたは、わざわざいである。……へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか。……」(マタイ 23 : 13 ~ 39)

(9)「たしかに人の子は、自分について書いてあるとおりに去って行く。しかし、人の子を裏切るその人は、わざわざいである。その人は生れなかった方が、彼のためによかったであろう。イエスを裏切ったユダが答えて言った、先生、まさか、わたしではないでしょう。イエスは言われた、いや、あなただ。」(マタイ 26 : 24 ~ 25)

(10)「それから、弟子たちの所にきてごらんになると、彼らが眠っていたので、ペテロに言われた、あなたがたはそんなに、ひと時もわたしと一緒に目をさましていることが、できなかったのか。誘惑に陥らないように、目をさまして祈っていなさい。心は熱しているが、

肉体が弱いのである。」(マタイ 26 : 40 ~ 41)

以上、イエス・キリストの態度を見ると、大変はっきりしているように、悔い改めのある生活については、極めて要求が厳しく、律法学者であろうと、パリサイ人であろうと、又自分の愛する弟子であろうと、間違ったものに対しては、極めて遠慮なく、率直に忠告し、責め、叱り、そして正されたのである。命に入るためには、片手や片足にでもなれと、又神の国に入るためには、片目にでもなれとの厳しい御言葉である。そして甚だしくは、律法学者やパリサイ人を「まむしの子ら」とまで叱られ、ペテロに対して「サタンよ、引きさがれ」と大変きついお叱りであった。これは、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となきなさい。」(マタイ 5 : 48)との御心をこの上なくはっきりと表わされるためのものであった。あたかも、「主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである。」(ヘブル書 12 : 6)とあるように、主は人々を愛し、救われるために、それ程厳格であったのである。

今日、われわれは基督教教育に従事しているが、どうしても力がなく、成果が少い。それは、教師たるものが、あまりにもイエス・キリストのこうした教育態度からかけ離れているためではなかろうか。或は、教師自身まだまだ人を訓誡するほどできていないと考え、又は生徒の機嫌を取ることが頭にしっかりとからみついていて、どうしても生徒を訓誡する事ができないかもしれない。或は、われわれは一般教育理念にばかり注意力が走るため、つい、「人間のニード」(Needs of Person)に適合せねばならないとばかり頭を使っている嫌がある。然し、われわれは、人間のニード (Needs of Person) もさることながら、いやしくもキリストの弟子であり、絶対服従が要求されている以上、「神のニード」つまり「神の御旨」(God's will)が先行しなくてはならないはずである。それ故、われわれ基督教教育者は、イエス・キリストが、神の御旨に反したものを厳しく忠告し、責め、叱り、そして正された事を覚えて、凡そ神の御旨からはずれるものを痛く責め、叱り、正さなければならない。パウロは、「兄弟たちよ。もしもある人が罪過に陥っていることがわかったなら、霊の人であるあなたがたは、柔和な心をもって、その人を正しなさい……。」(ガラテヤ書 6 : 1)と言った。こうする事によって、神に絶対服従できるように修練がくりかえされるのである。基督教教育者が、このような生徒の修練の責から逃れるならば、又生徒がこのような修練を受けられないなら、それは、明らかにキリストに従わないものであり、基督教教育に与っているものではないのである。

Ⅲ．結 語

結論的に言って、聖書は、イエス・キリストが救い主であり、彼を信ずる事によって、永遠の生命を得ると言う証しの書物であって、ただイエス・キリストの生涯を紹介するのが最後の目的ではないことは明らかである。あたかも、「しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、またそう信じて、イエスの名によっ

て命を得るためである。(ヨハネ福音書 20 : 31) と記されている通りである。

この事は、キリスト教教育を施行する上に於て、極めて重要なポイントである。何故なら、すでに述べたように、神の御言葉を通して、人びとがキリストに絶対服従するものとなるよう導き育てるわざが、キリスト教教育であるからには、聖書の題材 (subject matter) だけを教えると言うことは、まるで知脳装置 (mind-set) を製作するようなもので、^(註18)キリスト教教育の最終目的ではないからである。キリストを通しての神に対する絶対服従の教育は、言い換えれば、キリスト信仰への養育に他ならない。われわれは、キリスト教についての教理、制度、伝統及び行事などを、聖書及びその他の教材によって、生徒に教え授けることができよう。然し、われわれの最大関心事は、いわゆるそれらの宗教的なこと (religious matter) ではなくして、イエス・キリストを主と崇め、受け入れて、一生彼に忠誠を尽す信仰である。聖書を学ぶ事と、イエス・キリストの弟子となって、一生彼に忠誠を誓うことは、全く別の事である。ただの聖書の教授は比較的やすいが、キリスト信仰の伝達は、キリストに忠誠を誓う信仰の共同体の中に於てなされる難しいものである。この信仰の共同体が、真剣に人びとをキリストに忠誠を誓って一生服従するよう導き育てなければ、共同体としての使命が果されていない。

それは、ただおもしろく、そして人間のニード (needs) にのみ適合するよう計画され進められるカリキュラムや教学法による教育ではなく、人間のニードに鑑みて教育学配慮をするのは良いが、神の御旨はこれを越えた最重要事であり、すべてのことに優先することであることを確信し、「われに従へ」と呼ばれるイエス・キリストの召に果敢に答えて、一切を捨て、従うようにする信仰教育である。この「われに従へ」と召命を発令されるイエス・キリストは慈しみ深い、同時に又われわれが最後まで忠実に神に支配され得るために、極めて厳しく、われわれを責め、叱り、正されるかたでもあることを忘れてはならない。信仰は神の賜であるが、教師は生徒がその賜を受け入れる環境造りをしなくてはならない。もしそういう環境造りをこわすものがあれば、教師はそれを正さなければならない。

それである故、安易な考えでキリスト教教育を施し、或はキリスト教教育に与っているとすれば、それは結局イエス・キリストを冒瀆することになる。むしろ、真のキリスト信仰を得るために、われわれはもっと厳格にキリスト教教育に従事して、人びとを訓練しなければならないのであるまいか。イエス・キリストは、「しかし、人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか。」(ルカ 18 : 8) と歎かわれたが、この御言葉は、今もわれわれ特にキリスト教教育者に審きの言葉として語っているのである。

(註)

- 1) 北陸学院短期大学紀要第9号 p.16 ~ p.31 参照。
- 2) Westerhoff, John H., "Will Our Children Have Faith", p.4
- 3) R. ヘンダーライト著、山内一郎訳「教会教育の神学」p.54
- 4) 山内一郎著「神学とキリスト教教育」p.207 ~ p.208
- 5) ibid., p.284
- 6) ibid., p.287

- 7) Niesel, Wilhelm 原著、渡辺信夫訳「カルヴァンの神学」p.181
- 8) 山内一郎著「神学とキリスト教教育」p.202
- 9) Bultmann, Rudolf 原著、川端純四郎、八木誠一共訳「イエス」p.75
- 10) マルコによる福音書 1 : 16 ~ 20 を参照
- 11) マルコによる福音書 2 : 14 を参照
- 12) Bonhoeffer, Dietrich, "The Cost of Discipleship", p.62
- 13) Niesel, Wilhelm 原著、渡辺信夫訳「カルヴァンの神学」p.204
- 14) ibid., p.203
- 15) ペテロ第一の手紙 2 : 21
- 16) 山内一郎著「神学とキリスト教教育」p.210
- 17) Calvin, John 原著、渡辺信夫訳「キリスト教綱要」IV、第 12 章 2, 5
Niesel, Wilhelm 原著、渡辺信夫訳「カルヴァンの神学」p.285
- 18) Westerhoff, John H., "Will Our Children Have Faith", p.20

参考文献

- Bonhoeffer, Dietrich, "The Cost of Discipleship", The Macmillan Company, Seventh Printing, 1966
- Bultmann, Rudolf 原著、三端純四郎・八木誠一共訳「イエス」、未来社、1963
- Calvin, John 原著、渡辺信夫訳「キリスト教綱要」IV /1, IV /2、新教出版社、1965
- Henderlite, Rachel 原著、山内一郎訳「教会教育の神学一教しと希望」、日本基督教団出版局、1968
- 黒田成子・松川成夫・奥田和弘・今橋 朗共編「キリスト教幼児教育概説」、日本基督教団出版局、1974
- Miller, Randolph C. 原著、安村三郎訳「聖書神学とキリスト教教育」、日本基督教団出版部、1956
- Niesel, Wilhelm 原著、渡辺信夫訳「カルヴァンの神学」、新教出版社、1960
- Schweizer, E. 原著、佐伯晴郎訳「イエス＝キリスト」、教文館、1974
- Smart, D. James, "The Teaching Ministry of the Church", The Westminster Press, 1954
- 高崎 毅・太田俊雄監修「キリスト教教育講座Ⅳ」、新教出版社、1958
- Taylor, Marvin J., "Foundations for Christian Education in an Era of Change", Abingdon, 1976
- Westerhoff, John H., "Will Our Children Have Faith", The Seabury Press, 1976
- Wyckoff, D. Campbell, "Theory And Design of Christian Education Curriculum", The Westminster Press, 1961
- 山内一郎著「神学とキリスト教教育」、日本基督教団出版局、1973